

父親・母親の養育態度が幼児の自己制御に及ぼす影響

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中道, 圭人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007334

父親・母親の養育態度が幼児の自己制御に及ぼす影響

Effects of Childrearing Styles on Young Children's Self-regulation.

中道圭人

Keito NAKAMICHI

（平成24年10月4日受理）

Abstract

This study examined the effects of father/mother's authoritative, authoritarian, and permissive childrearing styles on the self-regulation of their young children ($N=123$, aged 3- to 6-year). For self-assertiveness, the boys whose fathers were the authoritative or authoritarian childrearing styles had self-assertiveness stronger than the boy whose fathers were permissive. For self-inhibition, the children whose mothers were authoritative childrearing styles had self-inhibition stronger than the children whose mothers were authoritarian or permissive. Furthermore, the effects of the childrearing styles on the young children's self-regulation changed with the combination of parent's style or the children's gender. These results suggested the possibility that the childrearing styles proposed by Baumrind would encourage the children's suitable development even in Japan.

Key word: Parenting attitude(養育態度), Baumrind(バウムリンド), preschooler(就学前児), self-assertiveness(自己主張), self-inhibition(自己抑制)

問題・目的

養育者の養育態度は、幼児の発達に関わる大きな要因の1つである。この養育態度に関する考え方の1つとして、Baumrind(1967, 1971)の養育態度の分類がある。彼女は、応答性と統制を中心的な軸として、母親の養育態度をとらえようとした。応答性は母親と子どものコミュニケーションと養育に関わる、養育態度における“子どもの意図・欲求に気付き、愛情ある言語や身体的表現を用いて、子どもの意図をできる限り充足させようとする”側面、統制は養育上の統制と親の成熟要求に関わる、養育態度における“子どもの意志に関わらず、母親が子どもにとって良いと思う行動を決定し、それを強制する”側面である。そしてBaumrind(1967, 1971)はこの応答性と統制の2軸の高低により、養育態度を権威的(authoritative)、権威主義的(authoritarian)、許容的(permissive)の3つに分類した。権威的態度は応答性と統制のいずれも高いタイプで、子どもとの温かく、協調的な関わりを持ち、その温かさの下で柔軟に統制を行うような特徴がある。権威主義的態度は、統制は高いが応答性は低いタイプで、子ども

を服従させ、子どもの心理や行動を厳しく統制するような特徴がある。許容的態度は、応答性は高いが統制は低いタイプで、子どものどのような行動でも受容するような特徴がある。これらの養育態度の中で、特に権威的態度が子どもの健全な発達を促すこと (Baumrind, 1967, 1971) や、その影響は幼児期から青年期にわたり一貫していること (Baumrind, 1991) が示されている。

日本においても、少数ではあるがBaumrindの想定する養育態度と幼児の社会的行動 (中道・中澤, 2003; 戸田, 1998a, 1998b, 1999) や自己制御 (戸田, 2006) の関連が検討されている。たとえば中道・中澤 (2003) は、父親が権威的態度や許容的態度をとる家庭の幼児は、父親が権威主義的態度をとる家庭の幼児より、園での報復的攻撃行動が少ないことを示している。また戸田 (2006) は、母親が許容的な養育態度をとるほど、幼児の自己主張が低くなることを示している。しかしながら、中道・中澤 (2003) や戸田 (1998a, 1998b, 1999, 2006) 以外に、日本においてBaumrindの養育態度の概念に焦点をあて、幼児の発達との関連を検討した研究はほとんどみられない。全般的な養育態度が同じであったとしても、その養育態度が幼児の個々の領域の発達に及ぼす影響は、その文化や個人が重視する事柄によって異なる (e.g. Darling & Steinberg, 1993)。これを踏まえると、日本におけるBaumrindの養育態度が幼児の発達に及ぼす影響を知る上で、さらなる研究知見の蓄積が必要である。そこで本研究では、Baumrindの3つの養育態度と幼児の発達の関連を検討する。

次に幼児の発達に関して、本研究では社会的な自己制御 (self-regulation) 機能に注目する。社会的な自己制御は、社会的な場面において自己の欲求・意思や行動をコントロールする能力で、“自分の欲求・意志を外に向かって表し、実現していく”ような自己主張的側面と、“自分の欲求・意志を抑制し、それに基づく行動を抑止する”ような自己抑制的側面がある (柏木, 1988)。特に、幼児期における自己抑制的な側面の発達は、児童期の向社会的行動 (Eisenberg, Guthrie, Fabes, Reiser, Murphy, Holgren, Maszk, & Losoya, 1997) や算数能力・リテラシー (Blair & Razza, 2007) とも関連することが示されており、幼児期の自己制御機能をいかに育むかは、後の発達にとっても重要であると考えられる。

いくつかの先行研究 (e.g. 柏木, 1988; 尾崎・小野, 2008; 戸田, 2006) では、養育者の養育態度が幼児期の社会的な自己制御に関わる要因であることが示されている。しかしながら、それらの研究の中で、Baumrindの養育態度の概念に基づいた研究は戸田 (2006) だけである。また戸田 (2006) では母親だけを対象としており、父親の養育態度は扱われていない。近年、父親が子どもの発達に及ぼす直接的・間接的な影響が示されており、父親の役割は重要視されている (e.g. 佐々木・大日向・平塚・窪田・森・山口, 2000; Shwalb, Nakazawa, Yamamoto, & Hyun, 2004)。そのため、母親だけでなく、父親も含めて幼児の自己制御への影響を検討する必要がある。

また、幼児自身の性による親の養育態度の影響の違いや、父母の養育態度の組み合わせの影響の違いを検討する必要もある。たとえば尾崎・小野 (2008) は、父親が非難的な態度 (例: 子どもを怒鳴りつける, 罰を与える) をとるほど、男児の自己抑制は低くなるが、女児ではそのような関連は見られないことを示している。またNelson, Hart, Jin, Yang, & Olsen (2006) は、父親・母親の統制行動 (例: 子どもがきちんとなしないと仲良くしない, 子どもが従わないと叩く) の累積量と、父母の統制行動の量のズレが幼児の攻撃行動に及ぼす影響を検討した。その結果、まず統制行動の累積量が多いほど、男児・女児のいずれの関係性攻撃も多くなっていた。

また、父親より母親の統制行動が多いというズレは男児の関係性攻撃の多さと、母親より父親の統制行動が多いというズレは女児の関係性攻撃の多さと関連していた。これらの研究は、幼児自身の性や、父母の養育態度の一貫性あるいはズレが絡まりながら、幼児の発達に異なる影響を与えることを示している。

上記の点を踏まえ、本研究では両親の養育態度とその子どもの自己制御機能を調査し、父親・母親の養育態度やその組み合わせ、そして子ども自身の性別による自己制御機能の違いを検討することとした。これは、日本においてほとんど検討されていないBaurindに基づく養育態度が幼児の自己制御に及ぼす影響を明らかにすることになるだろう。

方法

調査協力者

静岡市内の私立保育園2園に在籍する幼児123名と、その父親96名、母親123名が調査に参加した。

参加した幼児の内訳は、年少児38名（男19名、女19名： $M = 3.58$ 歳、 $SD = .50$ ）、年中児41名（男16名、女25名： $M = 4.65$ 歳、 $SD = .58$ ）、年長児44名（男24名、女20名： $M = 5.53$ 歳、 $SD = .51$ ）であった。

次に参加した父親・母親に関して、父親の平均年齢は39.09歳（ $SD = 6.28$ ）、母親の平均年齢は35.37歳（ $SD = 4.98$ ）であった。結婚年数の平均は10.00年（ $SD = 3.95$ ）であり、子どもの人数は本調査の参加児を含めて平均2.41人（ $SD = 1.02$ ）であった。勤務形態に関して、父親は有職（常勤・パート）が81名、専業主夫が4名、その他・不明が11名であり、母親は有職が107名、専業主婦が2名、その他・不明が14名であった。

手続き

父親・母親の調査に関しては、保育所を通じて各家庭に調査の説明文書・調査への同意書・質問紙（フェイスシート、親の養育態度尺度）が同封された封筒を配布し、父親・母親それぞれに記入を依頼した（調査期間：2011年11-12月）。その際、封筒・同意書・質問紙に出席番号のナンバリングを行い、父親・母親・幼児のデータを一致できるようにした。記入後、担当保育者を通じて同意書・質問紙を回収した（回収率=79.35%）。また、回答の得られた家庭の幼児の自己制御機能を、幼児の担当保育者（女性9名、平均年齢=28.67歳、保育経験年数の平均=8.33年）に回答してもらった。

調査の測度

父親・母親の養育態度 中道・中澤（2003）の親の養育態度尺度を用いた。この尺度は、“子どもへの応答性（子どもの意図・欲求に気付き、愛情のある言語や身体的表現を用いて、子どもの意図をできる限り充足させようとする行動）”に関する項目群と、“子どもへの統制（子どもの意志とは関係なく、親が子どもにとって良いと思う行動を決定し、それを強制する行動）”に関する項目群の全22項目で構成されていた。父親・母親それぞれに、各項目に対して「全然あてはまらない（1）」～「ぴったりあてはまる（4）」の4件法で回答を求めた。

幼児の自己制御機能 大内・長尾・櫻井（2008）の幼児の自己制御機能尺度の内、“自己主張（例：自分から進んで意見や考えを述べる）”に関する7項目（ $\alpha = .71$ ），“自己抑制（例：遊

具や玩具の順番を守れる)”に関する5項目 ($\alpha = .57$) を用いた。対象となった幼児の担当保育者に、各項目に対して「きわめて少ない (1)」～「非常に多い (5)」の5件法で回答を求めた。

結果

養育態度尺度の因子分析

本研究 (2011年実施) と中道・中澤 (2003) の調査 (2001年実施) には10年の隔りがあるため、時代の変化に伴い尺度の妥当性が損なわれている可能性があった。そこで、本研究では最初に、中道・中澤 (2003) の養育態度尺度に関する因子分析を実施した。

養育態度尺度の各項目の回答に対して、「全然あてはまらない」～「ぴったりあてはまる」の順に1～4点を与えて得点化した。その後、父親と母親の全データ (219名) を一括し、養育態度に関する22項目について因子分析 (重み付けのない最小二乗法, バリマックス回転) を行った。因子負荷量が.35未満の項目や、複数の因子に.35以上の因子負荷量を示し、かつその差が.10未満の項目を削除して因子分析を繰り返し、2因子を抽出した。最終的な因子分析の結果を Table 1 に示す。

Table 1 親の養育態度尺度の因子分析 (重み付けのない最小二乗法, バリマックス回転)

	応答性	統制	
1. 子どもが一人で遊んでいて、退屈そうだなと思った時、 加わって一緒に遊ぶ。	.737	-.003	
9. あなたが家にいる時、 ボール遊びやゲームなど、子どもと一緒に過ごす時間を持っている。	.700	-.083	
4. 子どもがイライラしていると思った時、 「どうしたの」と聞いてみる。	.688	.233	
5. 子どもが今までできなかった事ができて喜んでいる時、 「すごいね」などと言葉をかけて喜び合う。	.686	.382	
2. どこかに出かけて、子どもが疲れているなと感じた時、 休んだり、子どもを抱っこする。	.650	.046	
10. 子どもが自分で何かを作っている時、あなたは子どもの話を聞いたりして、 子どもが「やって」と言うような時だけ手を貸す。	.519	.205	
3. 子どもを抱きしめたり、やさしい言葉をかけて愛情を示している。	.518	.314	
11. 家族で遊びに行く時、 親の都合だけでなく、できる限り子どもの行きたい所を取り入れる。	.500	.095	
22. 子どもがあなたと決めた約束を守らない時、その約束をもう一度教える。	.173	.676	
21. 図書館や映画館など静かにしなければならない場所では、 子どもを静かにさせる。	.129	.610	
15. 子どもが友達と遊んでいて、友達が使っている玩具を 無理やり取ってしまった時、それを返させる。	.078	.590	
12. 買物に行って玩具を買う予定がない時に、 子どもが玩具を欲しいと言って売り場から動かなくても、玩具は買わない。	-.044	.566	
14. 子どもが自分のやるべき事をやらない時、「やりなさい」と言う。	.123	.354	
	固有値	3.258	1.982
	寄与率	25.06	15.25
	累積寄与率	25.06	40.31

第一因子の8項目は、“子どもの意図・欲求に気付き、愛情のある言語的・身体的表現を用いて、子どもの意図をできる限り充足させようとする”側面に対応する項目群と考えられたため、「応答性」因子と命名した ($\alpha = .85$)。本研究では、中道・中澤 (2003) で応答性因子に含まれていた2項目 (項目6「あなたが忙しい時、子どもが遊びたがっても、遊ぶのを後回しにしてしまう」; 項目7「子どもが間違っただけの行動をした時、どうしてその行動をしたのか理由を聞き、どうしたらよかったのかを話し合う」) が削除され、新たな2項目 (項目5, 項目10) が加わっていた。

第二因子の5項目は、“子どもの意志とは関係なく、親が子どもにとって良いと思う行動を決定し、それを強制する行動”側面に対応する項目群と考えられたため、「統制」因子と命名した ($\alpha = .70$)。本研究と中道・中澤 (2003) での因子構造と比較すると、3項目 (項目13「子どもが自分のやっている事が上手いかず騒いでいる時、静かにさせる」; 項目19「子どもが寝る時間になっても、遊んでいて寝ない時、そのままにしておく (逆転項目)」; 項目20「子どもがあなたに対して悪い言葉遣いをしたとしても、気にしない (逆転項目)」) が削除された。

各因子に含まれる項目の合計得点を、その因子に含まれる項目数で割った得点を、それぞれ応答性得点、統制得点とした。

両親の養育態度尺度・幼児の自己制御尺度の記述統計

両親の応答性得点・統制得点 父親の応答性得点は3.13 ($SD = .44$)、統制得点は3.30 ($SD = .51$) であった。母親の応答性得点は3.16 ($SD = .49$)、統制得点は3.43 ($SD = .44$) であった。父親・母親の応答性得点・統制得点を比較すると、応答性得点 ($t(95)=.43, ns$) では両者に差は見られなかったが、統制得点 ($t(90)=2.88, p<.01, r=.29$) では父親より母親で得点が高かった。

次に、本研究のデータと中道・中澤 (2003) での父親172名・母親203名のデータを比較した。2001年実施の中道・中澤 (2003) では、父親の応答性得点は2.93 ($SD = .43$)、統制得点は3.29 ($SD = .40$) で、母親の応答性得点は2.96 ($SD = .35$)、統制得点は3.41 ($SD = .34$) であった。まず応答性得点では、父親 ($t(266)=3.62, p<.01, r=.22$)・母親 ($t(197)=3.96, p<.01, r=.27$) のいずれも本研究での得点が高かった。統制得点では、父親 ($t(160)=.17, ns$)・母親 ($t(209)=.43, ns$) のいずれも有意な差は見られなかった。

幼児の自己制御得点 自己主張得点の平均は3.52 ($SD = .65$)、自己抑制得点の平均は3.50 ($SD = .67$) であった。大内ら (2008) における7件法で得られた保育園児 (年中・年長) の得点を5件法に変換すると、自己主張は3.73で、自己抑制は3.57であった。両研究でほぼ得点に違いがないことから、本研究の参加児は自己主張・自己抑制に関して標準的なサンプルであると考えられた。

両親の養育態度の分類

応答性得点・統制得点それぞれの全体の平均値 (3.14, 3.38) を用いて、父親・母親それぞれをBaumrind (1967) に基づいた3つの養育態度のいずれかに分類した。具体的には、統制得点が平均値以上の協力者の内、応答性得点が平均値以上の協力者を権威的態度 (応答性 = 高, 統制 = 高)、平均値以下の協力者を権威主義的態度 (応答性 = 低, 統制 = 高) に分類した。また、統制得点が平均値以下の協力者を許容的態度 (統制 = 低) に分類した。その結果、父親では権威的態度に20名 (21.3%)、権威主義的態度に26名 (27.7%)、許容的態度に48名 (51.1%) が

分類され、母親では権威的態度に48名(40.0%)、権威主義的態度に31名(25.8%)、許容的態度に41名(34.2%)が分類された。

父親・母親の養育態度による幼児の自己制御の違い

父親の養育態度・母親の養育態度・幼児の自己制御のすべてのデータに欠損のない90組を対象に、父親・母親それぞれの養育態度による幼児の自己制御の違いを検討した。従来の研究(e.g. 柏木, 1988; 大内ら, 2008)では、幼児期の自己制御能力は年齢に伴い向上することが示されている。そこで本研究では、年齢発達の影響を排除するため、参加児の年齢を共変量に設定した共分散分析(ANOCVA)を実施することとした。

父親の養育態度・幼児の性による自己制御の違い 自己主張・自己抑制の得点それぞれを従属変数とし、参加児の年齢を共変量とした父親の養育態度(3)×子の性(2)の共分散分析を行った。父親の養育態度・子の性別の、共変量を調整後の自己制御得点をTable2に示す。

まず自己主張に関する分析の結果、養育態度($F(2, 43)=2.20, ns$)および子の性($F(1, 83)=.40, ns$)の主効果は有意でなかったが、養育態度×子の性の交互作用($F(2, 83)=5.58, p<.01, \eta_p^2=.13$)が有意であった。交互作用(Figure1)について検討するため、子の性別に各養育態度の自己主張得点を比較した。その結果、男児($F(2, 83)=7.94, p<.01, \eta_p^2=.16$)での単純主効果が有意で、権威的態度($p<.01$)および権威主義的態度($p<.10$)より許容的態度で自己主張得点が低かった。女児($F(2, 83)=.83, ns$)での単純主効果は有意でなかった。

次に自己抑制に関する分析の結果、養育態度の主効果($F(2, 83)=.30, ns$)は有意でなかったが、子の性の主効果($F(1, 83)=4.72, p<.05, \eta_p^2=.07$)が有意で、男児より女児で自己抑制得点が高かった。また、養育態度×子の性の交互作用($F(2, 83)=2.78, p<.10, \eta_p^2=.09$)が有意傾向であった。交互作用(Figure1)について検討するため、子の性別に各養育態度の自己抑制得点を比較した。その結果、男児($F(2, 83)=1.99, ns$)、女児($F(2, 83)=.66, ns$)のいずれの単純主効果も有意でなかった。

Table 2 父親の養育態度・子の性別の年齢統制後の自己制御得点

	父親の養育態度	自己主張	自己抑制
男児	権威的態度($n = 11$)	4.01 (0.17)	3.17 (0.20)
	権威主義的態度($n = 10$)	3.80 (0.19)	3.77 (0.22)
	許容的態度($n = 25$)	3.27 (0.11)	3.32 (0.13)
女児	権威的態度($n = 8$)	3.62 (0.20)	3.86 (0.23)
	権威主義的態度($n = 15$)	3.49 (0.14)	3.58 (0.17)
	許容的態度($n = 21$)	3.73 (0.12)	3.79 (0.14)
全体	権威的態度($n = 19$)	3.82 (0.13)	3.52 (0.16)
	権威主義的態度($n = 25$)	3.65 (0.12)	3.67 (0.14)
	許容的態度($n = 46$)	3.50 (0.08)	3.56 (0.10)

括弧内は標準誤差

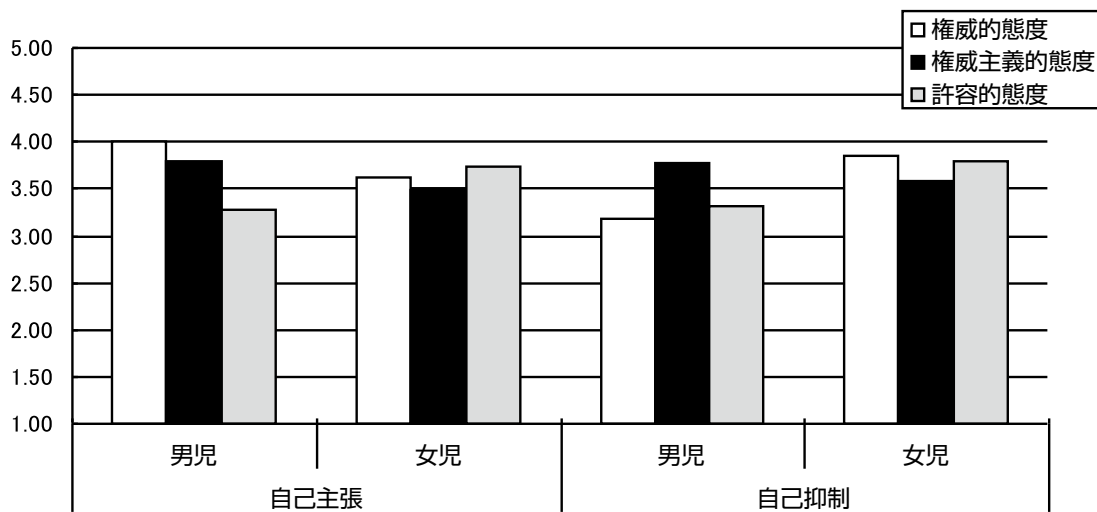


Figure 1 父親の養育態度×子の性の交互作用

Table 3 母親の養育態度・子の性別の年齢統制後の自己制御得点

母親の養育態度		自己主張	自己抑制
男児	権威的態度 (n = 16)	3.66 (0.15)	3.58 (0.17)
	権威主義的態度 (n = 18)	3.39 (0.14)	3.29 (0.16)
	許容的態度 (n = 12)	3.69 (0.17)	3.24 (0.19)
女児	権威的態度 (n = 19)	3.67 (0.14)	3.92 (0.15)
	権威主義的態度 (n = 10)	3.46 (0.19)	3.49 (0.20)
	許容的態度 (n = 15)	3.68 (0.15)	3.66 (0.17)
全体	権威的態度 (n = 35)	3.67 (0.11)	3.75 (0.11)
	権威主義的態度 (n = 28)	3.43 (0.12)	3.39 (0.13)
	許容的態度 (n = 27)	3.69 (0.12)	3.45 (0.13)

括弧内は標準誤差

母親の養育態度・幼児の性による自己制御の違い 自己主張・自己抑制の得点それぞれを従属変数とし、参加児の年齢を共変量とした母親の養育態度(3)×子の性(2)の共分散分析を行った。母親の養育態度・子の性別の、共変量を調整後の自己制御得点をTable3に示す。

まず自己主張に関する分析の結果、養育態度 ($F(2, 83)=1.57, ns$) および子の性 ($F(1, 83)=.04, ns$) の主効果、養育態度×自己抑制の交互作用 ($F(2, 83)=.04, ns$) はいずれも有意でなかった。

次に自己抑制に関する分析の結果、子の性の主効果 ($F(1, 83)=5.34, p<.05, \eta_p^2=.08$) が有意で、男児より女児で自己抑制得点が高かった。また、養育態度の主効果 ($F(2, 83)=2.43, p<.10, \eta_p^2=.07$) が有意傾向で、権威的態度より権威主義的態度・許容的態度で自己抑制得点が高い傾向があった ($ps<.10$)。養育態度×自己抑制の交互作用 ($F(2, 83)=.20, ns$) は有意でなかった。

両親の養育態度の組み合わせによる幼児の自己制御の違い

養育態度の組み合わせの分類 両親の養育態度の組み合わせ（家族タイプ）の分類を行った。父母の養育態度のすべての組み合わせ（9タイプ）に分類した場合、いくつかのタイプが0組あるいは少数になってしまった。そのため、本研究では父親・母親90組を、両親が2人とも同じ養育態度である3タイプ（両親・権威型、両親・権威主義型、両親・許容型）、もしくは両親が異なる養育態度である3タイプ（権威・権威主義型、権威・許容型、権威主義・許容型）のいずれかに分類した。その結果、両親・権威型に14組（15.6%）、両親・権威主義型に10組（11.1%）、両親・許容型に17組（18.9%）、権威・権威主義型に10組（11.1%）、権威・許容型に16組（17.8%）、権威主義・許容型に23組（25.6%）が分類された。

家族タイプによる幼児の自己制御の違い 自己主張・自己抑制の得点それぞれを従属変数とし、参加児の年齢を共変量とした家族タイプ（3）×子の性（2）の共分散分析を行った。家族タイプ・子の性別の、共変量を調整後の自己制御得点を Table4に示す。

まず自己主張に関する分析の結果、家族タイプの主効果（ $F(5, 77)=2.48, p<.05, \eta_p^2=.14$ ）、家族タイプ×子の性の交互作用（ $F(5, 77)=3.12, p<.05, \eta_p^2=.17$ ）が有意であった：子の性の主効果（ $F(1, 77)=.00, ns$ ）は有意でなかった。交互作用（Figure2）について検討するため、子の性別に各タイプの自己主張得点を比較した。その結果、男児（ $F(5, 77)=5.23, p<.01, \eta_p^2=.25$ ）での単純主効果が有意で、権威・許容型および権威主義・許容型より両親・権威型で得点が高かった（ $ps<.01$ ）。女児（ $F(5, 77)=.73, ns$ ）での単純主効果は有意でなかった。

Table 4 家族タイプ・子の性別の年齢統制後の自己制御得点

	家族タイプ	自己主張	自己抑制
男児	両親・権威型 ($n = 8$)	4.10 (0.19)	3.36 (0.23)
	両親・権威主義型 ($n = 6$)	3.92 (0.24)	3.79 (0.28)
	両親・許容型 ($n = 10$)	3.71 (0.17)	3.16 (0.20)
	権威・権威主義型 ($n = 5$)	3.69 (0.24)	3.02 (0.28)
	権威・許容型 ($n = 6$)	3.02 (0.23)	3.93 (0.27)
	権威主義・許容型 ($n = 11$)	3.09 (0.16)	3.24 (0.19)
女児	両親・権威型 ($n = 6$)	3.71 (0.22)	4.01 (0.26)
	両親・権威主義型 ($n = 4$)	3.37 (0.27)	3.50 (0.31)
	両親・許容型 ($n = 7$)	3.77 (0.20)	3.67 (0.24)
	権威・権威主義型 ($n = 5$)	3.32 (0.24)	3.47 (0.28)
	権威・許容型 ($n = 10$)	3.73 (0.17)	4.02 (0.20)
	権威主義・許容型 ($n = 12$)	3.63 (0.16)	3.59 (0.19)
全体	両親・権威型 ($n = 14$)	3.90 (0.15)	3.68 (0.18)
	両親・権威主義型 ($n = 10$)	3.64 (0.18)	3.65 (0.21)
	両親・許容型 ($n = 17$)	3.74 (0.13)	3.42 (0.15)
	権威・権威主義型 ($n = 10$)	3.50 (0.17)	3.25 (0.20)
	権威・許容型 ($n = 16$)	3.38 (0.14)	3.97 (0.17)
	権威主義・許容型 ($n = 23$)	3.36 (0.12)	3.42 (0.14)

括弧内は標準誤差

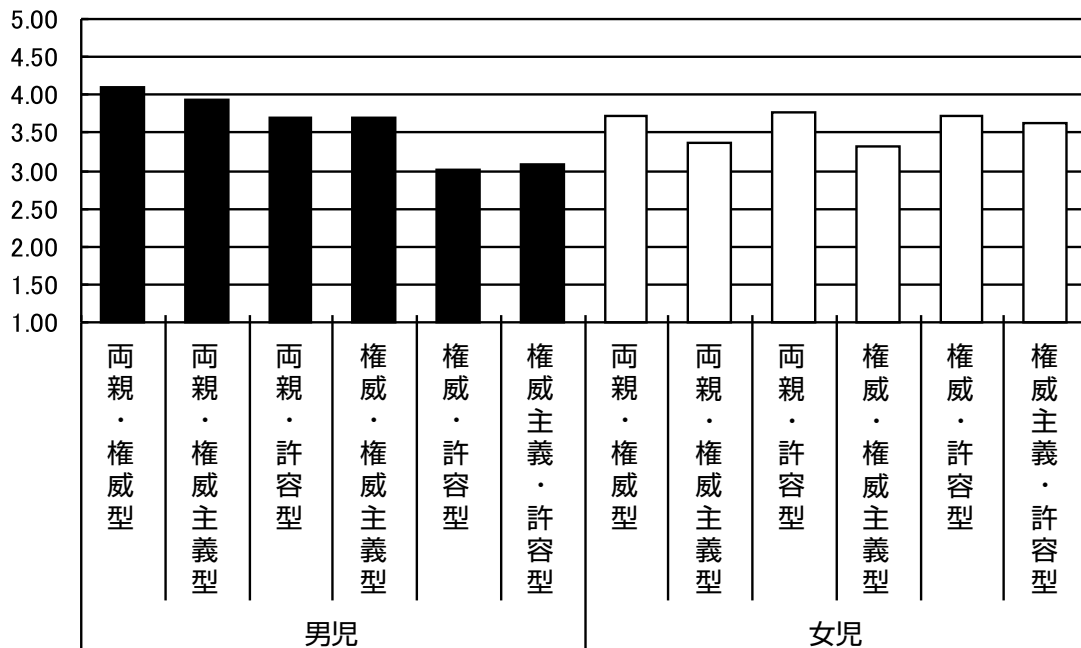


Figure 2 父親の養育態度×子の性の交互作用

次に自己抑制に関する分析の結果，子の性の主効果 ($F(1, 77) = 4.36, p < .05, \eta_p^2 = .07$) が有意で，男児より女児で自己抑制得点が高かった。また，家族タイプの主効果 ($F(5, 77) = 2.21, p < .10, \eta_p^2 = .14$) が有意傾向で，権威・権威主義型より権威・許容型で得点が高い傾向があった ($p < .10$)。家族タイプ×自己制御の交互作用 ($F(5, 77) = .83, ns$) は有意でなかった。

考 察

本研究では，Baumrind (1967, 1971) の養育態度の考え方に基づいて，父親・母親それぞれの養育態度や両親の養育態度の組み合わせが幼児の自己制御に及ぼす影響，そして，その影響の幼児自身の性による違いを検討した。

最初に，両親の養育態度の時代的变化について述べる。本研究では，中道・中澤 (2003) のBaumrindの養育態度尺度を用いた。本研究は2011年に実施されており，2001年実施の中道・中澤 (2003) から10年が経過していた。時代によって養育態度が変容する可能性があったため，本研究では養育態度尺度の因子分析を行った。その結果，いくつかの項目は中道・中澤 (2003) と異なっていたものの，“応答性”と“統制”にそれぞれ対応する2因子構造が確認された。10年経過した2011年時点でも，中道・中澤 (2003) の養育態度尺度の因子的妥当性が示されたといえよう。また，中道・中澤 (2003) と本研究での応答性得点・統制得点を比較したところ，応答性得点は2001年時点より本研究の父親・母親で高かった。この10年間で，愛情ある言語や身体的表現を用いて，子どもの意図・欲求をできる限り充足させようとする側面が強まっているようであった。この変化の背景の1つには，親の子育てに対する意識の変化が考えられる。たとえば，Benesse次世代育成研究所 (2011) の調査では，母親の肯定的な子育て意識（子どもがかわいくてたまらないと思う，子どもを育てるのは楽しく幸せなことだと思う，子どもと遊ぶのはとてもおもしろいと思う）を持つ人が，2000年より2010年で多くなっていた。このよう

な子育て意識の変化が、応答的な態度の増加をもたらしたのかもしれない。

次に、父親・母親それぞれの養育態度が幼児の自己制御に及ぼす影響について論じていく。まず父親に関して、父親が許容的態度である場合、権威的態度や権威主義的態度である場合よりも男児の自己主張得点が低かった。女児の自己主張は、父親の養育態度による違いはなかった。一方、自己抑制に関しては、男児・女児のいずれにおいても父親の養育態度による明確な違いは見られなかった。つまり、父親の養育態度は男児の自己主張のみに影響していた。このような父親の影響が男児のみで見られるという結果は、尾崎・小野（2009）の結果と疑似している。この養育態度による違いに関して、特に統制的な側面が自己主張に影響していたと考えられる。Baumrind（1967, 1971）は、養育態度の中の統制的な側面を特に重視した上で、それが応答的な側面を伴っている場合（つまり、権威的態度）に最も子どもの健全な発達を促すと考えていた。前述のように、現代の日本では養育態度の応答的な側面が全般的に高くなっている。そのため、権威的態度だけでなく、権威主義的態度に分類される場合であっても、適切な自己主張の発達を促していたのかもしれない。いずれにせよ本研究の結果は、幼児の自己制御の発達に父親の養育態度が影響するというさらなる証拠を示した。父親の養育態度が男児の自己主張にのみ影響した理由については、後に論じる。

また母親に関して、自己主張では養育態度による違いは見られなかった。一方、自己抑制に関しては、男児・女児のいずれにおいても、母親が権威主義的態度や許容的態度である場合、権威的態度である場合より自己抑制得点が低い傾向があった。これは、Baumrind（1961, 1971）の考えと一致するものであり、戸田（2006）や柏木（1988）でも類似の結果が示されていた。母親が権威主義的態度である場合、幼児は家庭で自らの欲求を充足する機会が少なくなり、欲求不満の状態になる可能性がある。その結果として、園で自らの行動を抑制するのが困難になるのかもしれない。また、母親が許容的態度である場合、欲求は充足されるものの、幼児は待つことやルールに従うといった社会的な経験が少なくなり、集団の中で適切に自己抑制することができなくなるのかもしれない。それぞれの養育態度は異なるプロセスで幼児の自己抑制に影響している可能性はあるが、日本においてもBaumrind（1967, 1971）が想定していた方向で、母親の養育態度が幼児の自己制御と関連することが示されたといえよう。

では、なぜ父親の養育態度は男児の自己主張にだけ、母親の養育態度は男児・女児の自己抑制にだけ影響したのだろうか。この点に関して、親が持つ子どもへの発達期待の影響が考えられる。日本の母親はアメリカの母親より、子どもの自己主張より従順さ・礼儀正しさといった自己抑制的側面の発達を重視している（e.g. 東・柏木・ヘス, 1981）。実際に日本の幼児はアメリカの幼児に比べて自己抑制が強く、この日米間の幼児の発達の違いは親の発達期待の違いによってもたらされている可能性が示唆されている（柏木, 1988）。本研究においても、母親は自分の子どもに対して自己主張より自己抑制の発達を重視していたため、自己抑制において養育態度による違いが見られた可能性がある。また飯島（1997）は、父親の性役割観（例：男は外へ女は内へ）の強さは男児の自己主張の高さと関連するが、女児ではそのような関連は見られないことを示している。母親とは逆に、父親は性役割観に沿うような自己主張を重視する発達期待を男児に対して持っていたため、男児でのみ影響が見られたのかもしれない。父親の発達期待の影響に関してはほとんど研究がないことを踏まえると、今後は特に父親の発達期待を含めた上での検討が必要であろう。

続いて、父親・母親の組み合わせ（家族タイプ）による影響の違いについて論じていく。ま

ず自己主張に及ぼす家族タイプの影響に関して、男児でのみ家族タイプによる違いが見られ、両親・権威型より権威・許容型や権威主義・許容型で得点が低かった。両親・権威型で自己主張得点が最も高いという結果は予測されることであるが、なぜ権威・許容型や権威主義・許容型で自己主張得点が低くなったのだろうか。本研究では、統計上の理由から父親・母親の要因を排除して、単純な養育態度の組み合わせで分析を行った。しかし、権威・許容型や権威主義・許容型の父母の組み合わせの内訳を見ると、権威・許容型では16組すべて、権威主義・許容型では23組中14組(60.9%)において、父親が許容的態度であった。前述のように、父親が許容的態度である場合に男児の自己主張得点は低くなるため、その影響が家族タイプの結果に反映されたのかもしれない。

しかし、父親の許容的態度が影響しているなら、両親・許容型でも自己主張得点が低くなるはずである。この点について、両親の養育態度の一貫性あるいはズレが異なる影響をもたらした可能性がある。たとえば奥田(1996)は、両親が共に受容的な態度をとる家庭の幼児は、両親が共に指示的な態度をとる家庭や受容的態度・指示的態度が組み合わせられている家庭の幼児より自律性が高いことを示している。またNelson et al.(2006)では、父母の統制行動のズレは幼児の攻撃行動を増加させることが示されていた。この態度の一貫性という観点からすると、両親・許容型は両親の態度が不一致の場合(権威・権威主義型、権威・許容型、権威主義・許容型)より、子どもにポジティブな影響を与える可能性がある。態度自体の影響とその組み合わせの影響が相殺されたのかもしれない。これらの可能性は本研究では検討できないため、今後、協力者を増やした上でさらに検討する必要がある。

次に自己抑制に及ぼす家族タイプの影響に関して、男児・女児のいずれにおいても権威・権威主義型より権威・許容型で得点が高かった。この点に関して、前述の母親の養育態度の影響に関する結果では、母親が権威的態度である場合、権威主義的態度や許容的態度である場合より幼児の自己抑制得点が高かった。権威・許容型では、16組すべてにおいて母親が権威型であった。自己主張の結果と同様、自己抑制の結果は組み合わせの効果というより、母親の養育態度の影響を反映している可能性がある。

だが、許容的態度が子どもの発達にとって良い影響を持たないこと(Baumrind, 1967, 1971)を踏まえると、この結果は、父親の許容的態度の影響を超えて母親の養育態度が幼児の自己抑制の発達に強く影響していたことを示しているとも考えられる。この影響の強さには、前述の発達期待に加えて、子どもと接する量の違いが関わっているかもしれない。近年、様々な研究で父親の役割の重要性は認識されてきた(e.g. 佐々木ら, 2000; Shwalb et al., 2004)ものの、日常的な子どもとの関わり(例:遊ぶ, 買い物に行く, 食事をする)の多くは母親が担っている(Benesse次世代育成研究所, 2011)。父親に比べて、母親は子どもと長時間接しており、子どもに自己抑制させるような経験を多く与えているのかもしれない。また、本研究での母親の影響の強さは、母親の養育態度の長期的な影響を反映している可能性もある。たとえばGatte-Gagné & Bernier(2011)は、15ヶ月時点での母親の子どもの主体性を重視した働きかけ(例:ヒントを与える, 子どものペースに合わせる)の多さが、2歳時点の子どもの言語能力を媒介として、3歳時点の認知的・行動的な抑制能力(例:満足の遅延課題, Day/Night課題での遂行)の高さと関連することを示している。この主体性を重視した働きかけは、本研究での権威的態度に対応するものである。こう考えると、より早期の時点での母親の権威的態度が後の社会的な抑制制御を育てていたのかもしれない。いずれにせよ、今後の研究では子どもと接する時

間・量を踏まえることや、長期的な影響を検討する必要がある。

全体的に、本研究は日本におけるBaumrind (1967, 1971) の養育態度に関するさらなる研究知見を提供したと共に、父親・母親それぞれの養育態度が幼児の自己主張・自己抑制の発達に異なる影響を及ぼしている可能性や、それらの影響が性別という子どもの特徴によって変化する可能性を示した。本研究では便宜上、親の養育態度が子どもに及ぼす影響という一方向を中心に論じてきた。しかし、子どもの性別による影響の違いにも示されているように、本来、親の養育態度と子どもの特徴・発達は双方向的な関係を持つものである (e.g. Belsky, 1984)。今後、親の養育態度に加えて、子どもの特徴をより踏まえた上での、双方向的視点からの研究がより一層必要であろう。

文 献

- 東洋・柏木恵子・R. D. ヘス (1981). 母親の態度・行動と子どもの知的発達：日米比較研究
東京：東京大学出版会
- Baumrind, D. (1967). Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior. *Genetic Psychology Monographs*, 75, 43-88.
- Baumrind, D. (1971). Current patterns of parental authority. *Developmental Psychology Monograph*, 4, 1-103.
- Baumrind, D. (1991). The influence of parenting style on adolescent competence and substance use. *Journal of Early Adolescence*, 11, 56-95.
- Belsky, J. (1984). The determinants of parenting: A process model. *Child Development*, 55, 83-96.
- Benesse次世代育成研究所 (2011). 第4回 幼児の生活アンケート報告書 (国内調査) 乳幼児をもつ保護者を対象に 東京：ベネッセコーポレーション
- Blair, C., & Razza, R. P. (2007). Relating effortful control, executive function, and false belief understanding to emerging math and literacy ability in kindergarten. *Child Development*, 78, 647-663.
- Darling, N., & Steinberg, L. (1993). Parenting style as context: An integrative model. *Psychological Bulletin*, 113, 487-496.
- Eisenberg, N., Guthrie, I. K., Fabes, R. A., Reiser, M., Murphy, B. C., Holgren, R., Maszk, P., & Losoya, S. (1997). The relations of regulation and emotionality to resiliency and competent social functioning in elementary school children. *Child Development*, 68, 295-311.
- Gatte-Gagné, C., & Bernier, A. (2011). Prospective relations between maternal autonomy support and child executive functioning: Investigating the mediating role of child language ability. *Journal of Experimental Child Psychology*, 110, 611-625.
- 飯島婦佐子 (1997). 家族システムと幼児の自己の発達-父親の性役割観, 母親からみた父親のソーシャルサポートと母性意識. 性格心理学研究, 6, 50-64.
- 柏木恵子 (1988). 幼児期における「自己」の発達-行動の自己制御機能を中心に- 東京：東京大学出版会
- 中道圭人・中澤 潤 (2003). 父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連. 千葉大学教育

学部研究紀要, 51, 173-179.

Nelson, D. A., Hart, C. H., Jin, S., Yang, C., & Olsen, J. A. (2006). Aversive parenting in China: Associations with child physical and relational. *Child Development*, 77, 554-572.

奥田援史 (1996). 養育態度のタイプと幼児の自立性. 滋賀大学教育学部紀要 (教育科学), 46, 1-7.

大内晶子・長尾仁美・櫻井茂男 (2008). 幼児の自己制御尺度の検討-社会的スキル・問題行動との関係を中心に-. 教育心理学研究, 56, 414-425.

尾崎康子・小野由加利 (2008). 幼児期における自己制御機能発達に及ぼす父母の養育態度の影響. 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究, 2, 39-44.

佐々木保行・大日向雅美・平塚裕子・窪田信子・森 和子・山口亜希子 (2000). 日本における最近10年間の父親研究の動向. 鳴門教育大学研究紀要, 15, 55-63.

Shwalb, D. W., Nakazawa, J., Yamamoto, T., & Hyun, J. H. (2004). Fathering in Japanese, Chinese, and Korean cultures: A review of the research literature. In M. E. Lamb (Ed.), *The role of the father in child development. Fourth Edition* (pp. 146-181). Hoboken, NJ: Wiley

戸田須恵子 (1998a). 母親の養育スタイルと子どもの攻撃的行動に関する研究. 北海道教育大学紀要 (第1部C), 48, 49-59.

戸田須恵子 (1998b). 父親の養育スタイルと子どもの攻撃的行動に関する研究. 北海道教育大学紀要 (教育科学編), 49, 63-77.

戸田須恵子 (1999). 幼児の引っ込み思案行動及び気質と父親の養育スタイルに関する研究. 北海道教育大学紀要 (第1部C), 49, 23-35.

戸田須恵子 (2006). 母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係について. 釧路論集-北海道教育大学釧路校研究紀要-, 38, 59-69.